

第七章 要 約

A 頭塔の構造と変遷

頭塔は平城京外京の四条大路の東延長部上で、東大寺中軸線の南延長部の西約100mに造営された仏塔である。土盛りを芯とし表面を石積・石敷で覆って瓦葺屋根を乗せる特異な構造をもつ。『東大寺要録』や『東大寺別当次第』が記す、神護景雲元年（767）に東大寺の僧実忠が造った「土塔」に当たる。発掘調査の結果、下層・上層の2時期があると判明した。

下層頭塔 上層建設時の破壊がひどいが、基壇を持つ三重塔に復原でき、ひとたびは完成していたと推定する。下層には構造的な欠陥が目立つ。たとえば、基壇・塔身ともに平面が正方形でなく北が広い台形を呈し、塔身各辺が直線ではなく屈曲し、基壇上面が水平でなく勾配をもち、基壇と塔身で振れの方向が逆、などの点である。そのため各部の寸法が計測場所によって一定しないが、辺長は基壇31.8～33.0m、塔身初重20.2～21.75m、二重13.2～14.3m、基壇高1.0～1.6mとなる。本来は下層1wと塔中心間の距離の3等分線上に、下層2w・3wを置く設計であり、塔身初重高3.45m、下層1wのみの高さ2.35mほど、下層1pには30%勾配程度の瓦葺の屋根があったと推定する。東面中央に大型の仏龕を置くが、他の仏龕は未確認である。

上層頭塔 下層の基壇を踏襲するものの、塔身のかなりを破壊し埋め尽くし増広したものである。下層から上層への改造の理由は、上述した下層の構造的欠陥を補正し、塔身を3段から7段に変えて高すぎる石積を低くするとともに、仏龕を増やすことにあった。しかし、補正は徹底せず、塔身平面形が不等四辺形、同一面の石積が非平行、基壇や塔身各段上面石敷が石積と並行する方向に勾配をもち、といった難点が残った。塔身の一辺は24.2～24.8m、高さは約8mである。本来は1wと塔中心間の距離の4等分線上に、3w・5w・7wを置き、それら石積間を2・3に分ける位置に2w・4w・6wを置く設計であったと推定する。石敷の幅と勾配は明瞭に対応し、偶数段上面は広くて5～10%の緩勾配、奇数段上面は狭くて25～30%の急勾配であるから、奇数段上面にのみ瓦を葺き、頂上には木造瓦葺塔身1重を置いたと考える。頂上の地下深くに礎石を据え、心柱を立てていた。上層には多数の仏龕がある。各面の1wに5、3wに3、5wに2、7wに1箇所、総計44箇所と推定できる。

下層・上層の築造年代はいつか。下層の造営にあたり古墳を破壊したことが判明し、これを正倉院文書「造南寺所解」の記事と関連付けることによって、下層の造営開始年代を天平宝字4年（760）頃と推定する。上層への改造は天平宝字末年から天平神護頃に始まり、竣工が『東大寺要録』・『東大寺別当次第』が記す神護景雲元年（767）と推定する。

奈良末以降 宝亀年間から長岡宮期に、落雷で頂部施設が焼失・廃絶したので、心柱を抜き取り、緡銭・琥珀玉を投入し祭祀を行ってから埋め戻した。平安時代初頭に、同位置に銭貨を埋納し地鎮をおこなってから、凝灰岩製六角屋蓋十三重塔を建立した。その後、瓦葺屋根や石積が崩壊し始め、石仏が露出するようになった。平安時代末の『七大寺巡礼私記』に頭塔を「十三重の大墓」と記すのは、こうした状態の描写と推定できる。11世紀後半を中心とする時

期に、石仏の前に多くの灯明皿などを並べて供養を行っている。11世紀以降、興福寺菩提院が頭塔の取り込みを図るので、菩提院における何らかの事件・事情と関わる可能性がある。14世紀以降にE0Wを改修、江戸時代に興福寺賢聖院から日蓮宗常德寺に譲渡されて末寺となり、東南隅・西南隅が一部破壊された。明治初期に国有地となり今日に至った。

B 頭塔の造立事情と系譜

上層頭塔の造立構想 既発見の27体の石仏から窺える造像構想は、華嚴経を主体としつつも、法華経を含むものであった。法華経の要素が入った事情は何か。頭塔は東大寺の附属施設であるから、東大寺の教説的環境から接近しよう。東大寺大仏本体の造立思想は華嚴経であり、大仏は華嚴の教主であるが、遅れて完成した台座蓮弁には梵網経所説の図が刻入された。その背景として、天平末から天平勝宝年間に華嚴経と梵網経を厳密に区別しない教説的環境が成立しており、さらには天台の教理の尊重があったとみる説が有力である。

そうした事態に至った契機としては、やはり鑑真に注目せざるをえない。彼は天台学の学匠で来朝に際して天台法華三大部をもたらしてもいた。彼が伝戒者として東大寺に戒壇を創立したのを契機に、律と華嚴の結合が天台と華嚴の結合に発展した可能性があるという。戒壇院の壇上には、法華経見宝塔品に基づき釈迦・多宝二仏を並座で安置する法華多宝塔が置かれたのである。上層頭塔における法華経の重視も、東大寺におけるこうした状況と同じ教説的背景によるとみられ、良弁や実忠は教界の趨勢に従ったのであろう。

上層頭塔の造立事情 天平宝字4年の光明皇太後の死後、藤原仲麻呂・淳仁天皇と孝謙上皇・道鏡の対立が深まった。良弁をはじめ東大寺僧家は反仲麻呂派となり、仲麻呂の乱に際しては安寛・実忠らが道鏡側に協力、乱後は実忠が百万塔を納める小塔院のモデルケースを作製するなどした。実忠による上層頭塔の造営も、仲麻呂の乱に起因した百万塔 小塔院の造立と軌を一にし、皇室の安泰、皇緒なき女帝の延命長寿、国家の守護を願うのが目的とする説を支持したい。しかしなお疑問は残る。①上層頭塔に上述のような教説的内容を表現する必要性は何だったのか。上層は下層を改造したものだが、構造やそれが表現する教義が上層と大きく異なっていた可能性があり、それを東大寺で主流となった最新の教義で塗り替えたのではないか。②下層の改修にとどめず新造に近い改作を断行したのはなぜか。下層頭塔には建造物として欠陥が多く出来が悪い。特に高すぎる石積は竣工後ほどなく崩落などの深刻な事態を引き起こしたのではないか。けっきょく上層への改造は、実忠の他の事績…東大寺造営の機能と熱意を低下させた造東大寺司の杜撰な仕事の尻拭い…と同様に評価できるだろう。

下層頭塔の造立事情 下層頭塔の東面中央の大仏龕には薬師如来を安置したのではないか。また占地は東大寺と新薬師寺の双方を意識している。加えて造営の着工は光明皇太後の死去の直前であった。東大寺・新薬師寺の双方に深く関わる皇太後の病氣平癒を薬師如来を本尊として祈願する施設として、称徳女帝が創立した可能性を考えたい。上層頭塔をまったくの新造でなく下層の改造で造ったのは、下層が称徳女帝ゆかりの施設だったからではないか。

頭塔の系譜 南方系説が有力だが、軸組でなく素材の積み上げで造る工法、瓦葺で軒の出がほとんど無い形状、明瞭な各層のセットバックから、むしろ中国の磚塔を発想源と見たい。磚積みではないが、在来の木造塔より中国色を強く打ち出せる造形として採用した可能性がある。